

白

芥川龍之介

一

ある春の午ひる過ぎです。白しろと云う犬は土を嗅かぎ嗅ぎ、静かな往来を歩いていました。狭い往来の両側にはずっと芽をふいた生垣いけがきが続き、そのまた生垣の間あいだにはちらほら桜なども咲いています。白は生垣に沿いながら、ふとある横町よこちょうへ曲りました。が、そちらへ曲ったと思うと、さもびっくりしたように、突然立ち止ってしまいました。

それも無理はありません。その横町の七八間先には印半纏しるしばんてんを着た犬殺しが一人、毘わなを後うしろに隠したまま、一匹の黒犬を狙ねらっているのです。しかも黒犬は何も知らずに、犬殺しの投げたパンか何かを食べているのです。けれども白が驚いたのはそのせいばかりではありません。見知らぬ犬ならばともかくも、今犬殺しに狙われているのはお隣の飼犬かいいぬの黒くろなのです。毎朝顔を合せる度にお互たがいの鼻の匂においを嗅ぎ合う、大の仲よしの黒なのです。

白は思わず大声に「黒君！ あぶない！」と叫ぼうとしました。が、その拍子ひょうしに犬殺しはじろりと白へ目をやりました。「教えて見ろ！ 貴様から先へ毘わなにかけるぞ。」——犬殺しの目にはありありとそう云う嚇おどかしが浮んでいます。白は余りの恐ろしさに、思わず吠ほえるのを忘れました。いや、忘れたばかりではありません。一刻もじっとしてはいられぬほど、臆病風おくびょうかぜが立ち出したのです。白は犬殺しに目を配くばりながら、じりじり後あとすざりを始めました。そうしてまた生垣いけがきの蔭に犬殺しの姿が隠れるが早いか、可哀かわいそうな黒を残したまま、一目散いちもくさんに逃げ出しました。

その途端とたんに毘が飛んだのでしょう。続けさまにけたたましい黒の鳴き声が聞えました。しかし白は引き返すどころか、足を止めるけしきもありません。ぬかるみを飛び越え、石ころを蹴散けちらし、往来どめの縄なわを擦すり抜け、五味ごみための箱を引っくり返し、振り向きもせず逃げ続けました。御覧なさい。坂を駈かけおりのを！

そら、自動車に轢ひかれそうになりました！

白はもう命の助かりたさに夢中になっているのかも知れません。いや、白の耳の底にはいまだに黒の鳴き声が蛇あぶのように唸うなっているのです。

「きゃあん。きゃあん。助けてくれえ！ きゃあん。きゃあん。助けてくれえ！」

二

白はやっと喘あえぎ喘ぎ、主人の家へ帰って来ました。黒堀くろべいの下の犬ぐりを抜け、物置小屋を廻りさえすれば、犬小屋のある裏庭です。白はほとんど風のように、裏庭の芝生しばふへ駈かけこみました。もうここまで逃げて来れば、毘わなにかかる心配はありません。おまけに青あおした芝生には、幸いお嬢さんや坊ちゃんもボオル投げをして遊んでいます。それを見た白の嬉しさは何と云えば好いなのでしょう？ 白は尻尾しっぽを振りながら、一足飛いつそくとびにそこへ飛んで行きました。

「お嬢さん！ 坊ちゃん！ 今日は犬殺しに遇いましたよ。」

白は二人を見上げると、息もつかずにこう云いました。(もっともお嬢さんや坊ちゃんには犬の言葉はわかりませんから、わんわんと聞えるだけなのです。)しかし今日はどうしたのか、お嬢さんも坊ちゃんもただ呆気あつけにとられたように、頭さえ撫なでてはくれません。白は不思議に思いながら、もう一度二人に話しかけました。

「お嬢さん！ あなたは犬殺しを御存じですか？ それは恐ろしいやつですよ。坊ちゃん！ わたしは助かりましたが、お隣の黒君は掴つかまりましたぜ。」

それでもお嬢さんや坊ちゃんは顔を見合せているばかりです。おまけに二人はしばらくすると、こんな妙なことさえ云い出すのです。

「どこの犬でしょう？ 春夫はるおさん。」

「どこの犬だろう？ 姉さん。」

どこの犬？ 今度は白の方が呆気あつけにとられました。(白にはお嬢さんや坊ちゃんの言葉もちやんと聞きわけることが出来るのです。我々は犬の言葉がわからないものですから、犬もやはり我々の言葉はわからないように考えていますが、実際はそうではありません。犬が芸を覚えるのは我々の言葉がわかるからです。しかし我々は犬の言葉を聞きわけることが出来ませんから、闇やみの中を見通すことだの、かすかな匂においを嗅かぎ当てることだの、犬の教えてくれる芸は一つも覚えることが出来ません。)

「どこの犬とはどうしたのです？ わたしですよ！ 白ですよ！」

けれどもお嬢さんは不相変あいかわらず気味悪そうに白を眺めています。

「お隣の黒の兄弟かしら？」

「黒の兄弟かも知れないね。」坊ちゃんもバットをおもちやにしながら、考え深そうに答えました。

「こいつも体中からだじゅうまっ黒だから。」

白は急に背中の中が逆立さかだつように感じました。まっ黒！ そんなはずはありません。白はまだ子犬の時から、牛乳ぎゅうにゆうのように白かったのですから。しかし今前足を見ると、いや、——前足ばかりではありません。胸も、腹も、後足あとあしも、すらりと上品に延のびた尻尾しっぽも、みんな鍋底なべそこのようにまっ黒なのです。まっ黒！ まっ黒！ 白は気でも違ったように、飛び上ったり、跳はね廻ったりしながら、一生懸命に吠ほえ立てました。

「あら、どうでしょう？ 春夫さん。この犬はきっと狂犬きょうけんだわよ。」

お嬢さんはそこに立ちすくんだなり、今にも泣きそうな声を出しました。しかし坊ちゃんは勇敢ゆうかんです。白はたちまち左の肩をぽかりとバットに打たれました。と思うと二度目のバットも頭の上へ飛んで来ます。白はその下をぐるが早いか、元来もときた方へ逃げ出しました。けれども今度はさっきのように、一町も二町も逃げ出しはしません。芝生しばふのはずれには棕櫚しゅろの木のかげに、クリーム色に塗ぬった犬小屋があります。白は犬小屋の前へ来ると、小さい主人たちを振り返りました。

「お嬢さん！ 坊ちゃん！ わたしはあの白なのですよ。いくらまっ黒になっても、やっぱりあの白なのですよ。」

白の声は何とも云われぬ悲しさと怒りとに震ふるえていました。けれどもお嬢さんや坊ちゃんにはそう云う白の心もちも呑みこめるはずはありません。現にお嬢さんは憎に

くらしそうに、

「まだあすこに吠ほえているわ。ほんとうに図々ずうずうしい野良犬のらいぬね。」などと、地だんだを踏んでいるのです。坊ちゃんも、——坊ちゃんは小径こみちの砂利じやりを拾うと、カーぱい白へ投げつけました。

「畜生ちくしょう！　まだ愚図愚図ぐずぐずしているな。これでもか？　これでもか？」砂利は続けさまに飛んで来ました。中には白の耳のつけ根へ、血の滲にじむくらい当たったのもあります。白はどうとう尻尾しっぽを巻き、黒塀の外へぬけ出しました。黒塀の外には春の日の光に銀の粉こなを浴びた紋白蝶もんしろちょうが一羽、気楽そうにひらひら飛んでいます。

「ああ、きょうから宿無し犬になるのか？」

白はため息を洩もらしたまま、しばらくはただ電柱の下にぼんやり空を眺めていました。

三

お嬢さんや坊ちゃんに逐おい出された白は東京中をうろうろ歩きました。しかしどこへどうしても、忘れることの出来ないのはまっ黒になった姿の事です。白は客の顔を映うつしている理髪店のはつてんの鏡を恐れました。雨上あまあがりの空を映している往来おうらいの水たまりを恐れました。往来の若葉を映している飾窓かざりまどの硝子ガラスを恐れました。いや、カフェのテーブルに黒ビールを湛たたえているコップさえ、——けれどもそれが何になりましょう？　あの自動車を御覧なさい。ええ、あの公園の外にとまった、大きい黒塗りの自動車です。漆うるしを光らせた自動車の車体は今こちらへ歩いて来る白の姿を映しました。——はつきりと、鏡のように。白の姿を映すものはあの客待の自動車のように、到るところにある訣わけなのです。もしあれを見たとすれば、どんなに白は恐れるでしょう。それ、白の顔を御覧なさい。白は苦しそうに唸うなったと思うと、たちまち公園の中へ駈かけこみました。

公園の中には鈴懸すずかけの若葉にかすかな風が渡っています。白は頭を垂たれたり、木々の間を歩いて行きました。ここには幸い池のほかには、姿を映すものも見当りません。物音はただ白薔薇しろばらに群むらがる蜂はちの声が聞えるばかりです。白は平和な公園の空気に、しばらくは醜みにくい黒犬になった日ごろの悲しさも忘れていました。

しかし、そう云う幸福さえ五分と続いたかどうか分かりません。白はただ夢のように、ベンチの並ならんでいる路みちばたへ出ました。するとその路の曲り角の向うにけたたましい犬の声が上がったのです。

「きゃん。きゃん。助けてくれえ！　きゃあん。きゃあん。助けてくれえ！」

白は思わず身震みぶるいをしました。この声は白の心の中へ、あの恐ろしい黒の最後をもう一度はつきり浮ばせたのです。白は目をつぶったまま、元来た方へ逃げ出そうとしました。けれどもそれは言葉通り、ほんの一瞬の間あいだの事です。白は凄すさまじい唸うなり声を洩もらすと、きりりとまた振り返りました。

「きゃあん。きゃあん。助けてくれえ！　きゃあん。きゃあん。助けてくれえ！」

この声はまた白の耳にはこう云う言葉にも聞えるのです。

「きゃあん。きゃあん。臆病おくびょうものになるな！　きゃあん。臆病ものになるな！」

白は頭を低めるが早いか、声のする方へ駈かけ出しました。

けれどもそこへ来て見ると、白の目の前へ現れたのは犬殺しなどではありません。ただ学校の帰りらしい、洋服を着た子供が二三人、頸くびのまわりへ縄なわをつけた茶色の子犬を引きずりながら、何かわいわい騒さわいでいるのです。子犬は一生懸命に引きずられまいともがきもがき、「助けてくれえ。」と繰り返していました。しかし子供たちはそんな声に耳を借すけしきありません。ただ笑ったり、怒鳴どなったり、あるいはまた子犬の腹を靴くつで蹴けったりするばかりです。

白は少しもためらわずに、子供たちを目がけて吠えかかりました。不意を打たれた子供たちは驚いたの驚かないのではありません。また実際白の容子ようすは火のように燃えた眼の色と云い、刃物はもののようにむき出した牙きばの列と云い、今にも噛かみつるかと思うくらい、恐ろしいけんまくを見せているのです。子供たちは四方しほうへ逃げ散りました。中には余り狼狽ろうばいしたはずみに、路みちばたの花壇へ飛びこんだのもあります。白は二三間追いかけた後のち、くるりと子犬を振り返ると、叱しかるようにこう声をかけました。

「さあ、おれと一しょに來い。お前の家うちまで送ってやるから。」

白は元来もときた木々の間あいだへ、まっしぐらにまた駈かけこみました。茶色の子犬も嬉しそうに、ベンチをくぐり、薔薇ばらを蹴散けちらし、白に負けまいと走って來ます。まだ頸にぶら下った、長い縄をひきずりながら。

×

×

×

二三時間たった後のち、白は貧しいカフェの前に茶色の子犬と佇たたずんでいました。昼も薄暗いカフェの中にはもう赤あかと電燈がともり、音のかすれた蓄音機ちくおんきは浪花節なにわぶしか何かやっているようです。子犬は得意とくいそうに尾を振りながら、こう白へ話しかけました。

「僕はここに住んでいるのです。この大正軒たいしょうけんと云うカフェの中に。——おじさんはどこに住んでいるのです？」

「おじさんかい？——おじさんはずっと遠い町にいる。」

白は寂しそうにため息をしました。

「じゃもうおじさんは家うちへ帰ろう。」

「まあお待ちなさい。おじさんの御主人はやかましいのですか？」

「御主人？　なぜまたそんなことを尋たずねるのだい？」

「もし御主人がやかましくなければ、今夜はここに泊とまって行って下さい。それから僕のお母さんにも命拾いの御礼を云わせて下さい。僕の家には牛乳だの、カレエ・ライスだの、ビフテキだの、いろいろな御馳走ごちそうがあるのです。」

「ありがとう。ありがとう。だがおじさんは用があるから、御馳走になるのはこの次にしよう。——じゃお前のお母さんによろしく。」

白はちよいと空を見てから、静かに敷石の上を歩き出しました。空にはカフェの屋根のはずれに、三日月みかづきもそろそろ光り出しています。

「おじさん。おじさん。おじさんと云えば！」

子犬は悲しそうに鼻を鳴らしました。

「じゃ名前だけ聞かして下さい。僕の名前はナポレオンと云うのです。ナポちゃんだのナポ公だのとも云われますけれども。——おじさんの名前は何と云うのです？」

「おじさんの名前は白と云うのだよ。」

「白——ですか？　白と云うのは不思議ですね。おじさんはどこも黒いじゃありませんか？」

白は胸が一ぱいになりました。

「それでも白と云うのだよ。」

「じゃ白のおじさんと云いましょう。白のおじさん。ぜひまた近い内うちに一度来て下さい。」

「じゃナポ公、さよなら！」

「御機嫌好ごきげんよう、白のおじさん！　さようなら、さようなら！」

四

その後のちの白はどうなったか？——それは一々話さずとも、いろいろの新聞に伝えられています。大おおかたどなたも御存じでしょう。度々たびたび危あやうい人命を救った、勇ましい一匹の黒犬のあるのを。また一時『義犬ぎけん』と云う活動写真の流行したことを。あの黒犬こそ白だったのです。しかしまだ不幸にも御存じのない方かたがあれば、どうか下しにも引用した新聞の記事を読んで下さい。

東京日日新聞。昨十八日(五月)午前八時四十分しじっぷん、奥羽線上おうせんのぼり急行列車が田端駅たばたえき附近の踏切ふみきりを通過する際、踏切番人の過失に依り、田端一二三会社員柴山鉄太郎しばやまてつたろうの長男実彦さねひこ(四歳さい)が列車の通る線路内に立ち入り、危く轢死れきを遂とげようとした。その時遅たくましい黒犬が一匹、稲妻いなずまのように踏切へ飛びこみ、目前に迫せまった列車の車輪から、見事に実彦を救い出した。この勇敢なる黒犬は人々の立騒たちさわいでいる間あいだにどこかへ姿を隠したため、表彰ひょうしょうしたいにもすることが出来ず、当局は大いに困っている。

東京朝日新聞。軽井沢かるいざわに避暑中のアメリカ富豪エドワード・バアクレエ氏の夫人はペルシア産の猫を寵愛ちようあいしている。すると最近同氏の別荘へ七尺余りの大蛇だいじゃが現れ、ヴェランダにいる猫を吞もうとした。そこへ見慣みなれぬ黒犬が一匹、突然猫を救いに駈かけつけ、二十分に亘わたる奮闘の後のち、とうとうその大蛇を嚙かみ殺した。しかしこのけなげな犬はどこかへ姿を隠したため、夫人は五千弗ドルの賞金を懸かけ、犬の行方ゆくえを求めている。

国民新聞。日本アルプス横断中、一時行方ゆくえ不明になった第一高等学校の生徒三名は七日なのか(八月)上高地かみこうちの温泉へ着した。一行は穂高山ほたかやまと槍やりヶ岳たけとの間あいだに途みちを失い、かつ過日の暴風雨に天幕テント糧食等を奪われたため、ほとんど死を覚悟していた。然しかるにどこか

らか黒犬が一匹、一行のさまよっていた溪谷けいこくに現れ、あたかも案内をするように、先へ立って歩き出した。一行はこの犬の後あとに従い、一日余り歩いた後のち、やっと上高地へ着することが出来た。しかし犬は目の下に温泉宿の屋根が見えると、一声ひとこえ嬉しそうに吠ほえたきり、もう一度もと来た熊笹くまざさの中へ姿を隠してしまったと云う。一行は皆この犬が来たのは神明しんめいの加護だと信じている。

時事新報。十三日(九月)名古屋市の大火は焼死者十余名に及んだが、横関よこぜき名古屋市長なども愛児を失おうとした一人である。令息武矩たけのり(三歳)はいかなる家族の手落からか、猛火の中の二階に残され、すでに灰燼かいじんとなろうとしたところを、一匹の黒犬のために啣くわえ出された。市長は今後名古屋市に限り、野犬撲殺ばくさつを禁ずると云っている。

読売新聞。小田原町おだわらまち城内公園に連日の人気を集めていた宮城みやぎ巡回動物園のシベリヤ産大狼おおおおかみは二十五日(十月)午後二時ごろ、突然巖乗がんにような檻おりを破り、木戸番きどばん二名を負傷させた後のち、箱根はこね方面へ逸走いっそうした。小田原署はそのために非常動員を行い、全町に亘わたる警戒線を布いた。すると午後四時半ごろ右の狼は十字町じゅうじまちに現れ、一匹の黒犬と噛かみ合いを初めた。黒犬は悪戦頗すこぶる努め、ついに敵を噛み伏せるに至った。そこへ警戒中の巡查も駈かけつけ、直ちに狼を銃殺した。この狼はルプス・ジガンティクスと称し、最も兇猛きようもうな種属であると云う。なお宮城動物園主は狼の銃殺を不当とし、小田原署長を相手どった告訴こくそを起すといきましている。等とう、等、等。

五

ある秋の真夜中です。体も心も疲れ切った白は主人の家へ帰って来ました。勿論もちろんお嬢さんや坊ちゃんはとうに床とこへはいつています。いや、今は誰一人起きているものもありますまい。ひっそりした裏庭の芝生しばふの上にも、ただ高い棕櫚しゅろの木の梢こずえに白い月が一輪浮んでいるだけです。白は昔の犬小屋の前に、露つゆに濡ぬれた体を休めました。それから寂しい月を相手に、こういう独語ひとりごとを始めました。

「お月様！ お月様！ わたしは黒君を見殺しにしました。わたしの体のまっ黒になったのも、大かたそのせいかと思っています。しかしわたしはお嬢さんや坊ちゃんにお別れ申してから、あらゆる危険と戦って来ました。それは一つには何かの拍子ひょうしに煤すすよりも黒い体を見ると、臆病を恥はじる気が起ったからです。けれどもしまいには黒いのがいやさに、——この黒いわたしを殺したさに、あるいは火の中へ飛びこんだり、あるいはまた狼と戦ったりしました。が、不思議にもわたしの命はどんな強敵にも奪われません。死もわたしの顔を見ると、どこかへ逃げ去ってしまうのです。わたしはどうとう苦しさの余り、自殺しようと思ひました。ただ自殺をするにつけても、ただ一目ひとめ会いたいのは可愛がって下さった御主人です。勿論お嬢さんや坊ち

ゃんはあしたにもわたしの姿を見ると、きっとまた野良犬のらいぬと思うでしょう。ことによれば坊ちゃんのバットに打ち殺されてしまうかも知れません。しかしそれでも本望です。お月様！ お月様！ わたしは御主人の顔を見るほかに、何も願うことはありません。そのため今夜ははるばるともう一度ここへ帰って来ました。どうか夜の明け次第、お嬢さんや坊ちゃんに会わせて下さい。」

白は独語ひとりごとを云い終ると、芝生しばふにあごをさしのべたなり、いつかぐつすり寝入ってしまいました。

×

×

×

「驚いたわねえ、春夫さん。」

「どうしたんだろう？ 姉さん。」

白は小さい主人の声に、はつきりと目を開ひらきました。見ればお嬢さんや坊ちゃんは犬小屋の前に佇たたずんだまま、不思議そうに顔を見合せています。白は一度挙げた目をまた芝生の上へ伏せてしまいました。お嬢さんや坊ちゃんは白がまっ黒に変った時にも、やはり今のように驚いたものです。あの時の悲しさを考えると、——白は今では帰って来たことを後悔こうかいする気さえ起りました。するとその途端とんです。坊ちゃんは突然飛び上ると、大声にこう叫びました。

「お父さん！ お母さん！ 白がまた帰って来ましたよ！」

白が！ 白は思わず飛び起きました。すると逃げるとでも思ったのでしょうか。お嬢さんは両手を延ばしながら、しっかり白の頸くびを押えました。同時に白はお嬢さんの目へ、じっと彼の目を移しました。お嬢さんの目には黒い瞳にありありと犬小屋が映うつっています。高い棕櫚しゆろの木のかげになったクリーム色の犬小屋が、——そんなことは当然に違いありません。しかしその犬小屋の前には米粒こめつぶほどの小ささに、白い犬が一匹坐っているのです。清らかに、ほっそりと。——白はただ恍惚こうこつとこの犬の姿に見入りました。

「あら、白は泣いているわよ。」

お嬢さんは白を抱だきしめたまま、坊ちゃんの顔を見上げました。坊ちゃんは——御覧なさい、坊ちゃんの威張いばっているのを！

「へっ、姉さんだって泣いている癖に！」

(大正十二年七月)